

軍事史学

第56巻 第4号

巻頭言

短い一九二〇年代、長い一九二〇年代

池田嘉郎

一九二〇年代はいつ始まり、いつ終わったのだろうか。「長い十八世紀」や「短い二十世紀」があるのだから、同じように考えてもよいはずだ。近年の第一次世界大戦研究は、休戦やパリ講和会議よりも後に、大戦の区切りをもつてくる傾向がある。ローベルト・ゲルヴァルト編のシリーズ「The Greater War」は、准軍事組織が活発であった戦後の数年間は、大戦の有機的な一部をなすという見方を打ち出している。これに対応させるならば、「短い一九二〇年代」の起点は二〇年代前半のどこかにずれこむ。終点を伝統にしたがって一九二九年の世界恐慌とするならば、「常態」が戻ってきた期間は本当に短かったということになる。

他方で、国際協調と軍縮という観点をとるならば、起点は伝統にしたがってパリ講和会議となるが、終点は一九三二年から三四年のジュネーブ軍縮会議となる。イリーナ・ホルマチ『国際社会への帰還——ソヴェト国家と国際連盟との闘争と協調、一九一九—一九三四——』（モスクワ、二〇一一年）では、時間的な枠組みはこの「長い一九二〇年代」となる（ホルマチの場合、三四年にソ連が国際連盟に加入するのが締めくくりとなる）。

どの論点や地域に着目するかで、一九二〇年代の長さや見え方は変わる。だが、様々な一九二〇年代像に共通の特徴もある。国際社会におけるヘゲモニー的中心的喪失と、それにとまなう局地的紛争の頻発がまずはそうだ。十九世紀半ば以降、国際社会の支配権を握っていたヨーロッパは、内部対立により大戦を引き起こし、戦後はヘゲモニー的中心ではなくなった。ヨーロッパは軍事力だけではなく、他地域がその価値観に従うことで支配力を発揮していた。そうした中心の喪失は、軍事バランスの崩ればかりか、政体の選択を含む価値観の争いをも引き起こし、局地的紛争が頻発することとなった。

「短い一九二〇年代」で常態への復帰と見えたものは、小さな紛争に満たされていた。「長い一九二〇年代」で国際協調の進展と見えたものは、ヘゲモニー的中心的喪失に対する国際社会の反作用であった。そう考えると、不穏な時代の相が浮き上がってくる。だが、小規模紛争の頻発も、ヘゲモニー的中心の不在も、世界史ではむしろ、それこそが常態だったのではないだろうか。実際、一九二〇年代は、アメリカの支配権がかすみ、中国の価値観は広く受け入れられず、局地紛争が続き、議会制民主主義が問い直される、今日の世界とよく似ているのである。

（東京大学）